

密教の形成

前 田 崇

インドの密教は土着的底流的宗教事象、時には異質的なそれを吸収した。このため従来の仏教においてみられない即世俗的慈悲救済の呪術的儀礼が形成展開されていった。

従つてインド密教の思想と儀軌においては、他宗派と複雑に交錯し関連する事象も見受ける。

本稿では密教儀軌のなかにみられるこの事象の一断面をインド教とのかかわり合いに求めて、明らかにし、それによつて、密教の形成について管見をえたい。

まず、当面の課題を検討するため、*Manjūśrīmita-kalpa*（以下 MNK と略）をとりあげてみる。

MNK 一九章における一字転輪明 *brum* をのべる頃は、密教がインド教と共通の地盤に根をおろすための消息を物語つている。つまり窟前において本尊を安置して次のようにのべられている。

『まさにそこに立つと、*Viṣṇu* の輪の恐怖が生じる。そこで輪の中に入つたならば、また (*brum* という明を) 念ずるだけで灰と

なる』

文中における *Viṣṇu* の *Cakra* については具体的には明瞭ではないが、それは *Viṣṇu* がもつ四種の器物の一つとされ、かつ *Viṣṇu* の *Magico-religious possibility* を標識するものであるといわれている。従つてこの *Cakra* を破つて灰にすることは、*Viṣṇu* の *Magico-religious possibility* を破することを意味する。それを打破する必要に迫られるほど、密教にとつて *Viṣṇu* が勢力をもつており、これを破することは密教自体を擁護することに他ならないであろう。

このように密教が無視出来ないほど、インド教はインド社会に密着して根強い力を持つていたことが窺われる。

またすでに指摘したが、密教とインド教とは貸借関係がみられる。明らかに *Siva* 派・*Viṣṇu* 派に属する真言そのものをのべて、それらは実は前劫におつて *Manjūśrī* によつて説かれたのだと説明する借用関係の事例が MNK におびてみられる。実際はインド教から真言を借用しているのである

が、これは密教がインド教と対抗しつつ、自己の權威性を示そうとする手法である。

このように密教はインド教の事象を借用するのみならず、その宗派の神殿 (Ayatana) そのものにおいて儀軌をなすこともあつたのである。

その一 『かの忿怒王の幟像をもつて寂靜処へ行つて、大自在 (Mahāheṣvara) の一つのリンガのある神殿でそのリンガに毒藥・血・黒芥子と漿水 (粥の一種) を塗り、ピチュマルダホの葉をもつて供養し (arcayivān)、人間の新しい腸で自身の聖紐となし、人間の頭蓋骨を右手にもち、(リンガ) を擲打するようにし、左手の人差し指でリンガを恐れさせ、最上の忿怒王となり、裸になり、髪を垂らし、大自在のリンガを左足で踏み、大自在のリンガが中央部で割れるまで忿怒の真言を誦すべし。二つに裂けたなら、大呼声が聞かれる。リンガを恐れるべきでない』

これにより悪しき王、敵が病氣に羅り、死ぬ。大自在のリンガとは Siva のそれであろう。従つて神殿 (Ayatana) は Siva 派のそれであると理解出来る。

また「大自在のリンガを左足で踏み」といわれていることには、仏教の主尊がインド教の神々を足下に踏んでいる密教美術と共通性があることが窺われる。

「大自在のリンガが中央部で割れるまで忿怒の真言を誦すべし」ということから、Siva の神体を破ることによつて、

Siva 教徒の王や敵を圧伏・打破しようとする類感呪術であることが窺われる。

その二 『大自在のリンガの右側でマダナの棘の木をもつて燃火して、ヴィカンタの焚木に毒藥・血・黒芥子を混ぜたもの千八遍護摩をなすならば、一切の敵は大病に羅つてしまひ、一切の所作をもつても不可能になる。二日目においては、大熱病か或は大病に羅るか、種々なる病いに或は諸々の非人にとりつかれて、最後には死ぬ。三日目に三齋時 (護摩を) なすなら、一切の (敵) すべては生命を失う』

ここにおいては、リンガの右辺で護摩をなしていることが知られる。そして例一同様に種々なる不幸をもたらすことによつて敵を圧伏するという陰慘な儀軌である。

しかしリンガを足下に踏みつける等の Siva に対する敵対的な所作はみられない。むしろそれと逆に、護摩により Siva を供養しつつ、敵を圧迫しようとしている。すなわち、仏教がインド教の神を利用するという注目すべき事象であるかと思われる。

次の例においてそれをより一層明確に窺うことが出来る。

その三 『同様に大自在の神殿へ日中行つて、Nimba の葉で供養し (abharvya)、大肉 (Mahamamsa) の香を献じて、敵の家が燃えるまで、また敵に大熱病の戦慄が生ずるまで誦すべし。もしまた忿怒者が持誦を止めないか、或はリンガがまた右傾するならば、

かの敵は死ぬ⁽⁸⁾』

一般に Manṣa は Siva 派の一つ Sakta 派における五摩事の一つとされている。従つてその香を献することは、仏教徒が Siva 派の供養法でもつてリンガを供養するものと思われる。そしてそれによつて Siva を仏教側に引入れて、自家薬籠化して、敵を圧伏することが窺われる。密教が Siva を利用、借用していることは明らかである。

さて以上の儀軌は先にものべたように敵に不吉な結果をもたらす陰惨な呪術的儀礼である。しかし咒われた者に信解等が生ずる時、咒いから解放して元に戻す儀軌も見受けられるのである。

この儀軌を Pratyāyana (slar-gso-ba、如故)と云う。Pratyāyana は convincing; credible の意味があるとされるが、しかしそれは praty a vi (還る) から派生した語であるかと思われる。それに対応するチベット語・漢語はその意をよく汲んでいるかと思われる。

その儀軌は極めて簡単に記されている。先の第二例の場合、次のようにのべられている。

『如故(の儀軌)においては、乳を護摩すれば、寂靜となり、一切の国におつて一切の敵は安樂となる⁽⁹⁾』

Pratyāyana のためには、白乳が主に用いられていることが窺われる。先の例三の場合においても次のようにのべられて

ている。

『かのリンガを水で洗つて、非常に冷たい牛乳で沐浴させるならば、(咒された者)は安樂となる⁽¹⁰⁾』

不吉な結果をもたらす儀軌と対照的に、それにより咒われた者を救済する儀軌もあつたことが窺われる。

これらの儀軌は一見しただけでは相矛盾しているようであるが、前者の儀軌は調伏法 (abhiṣāka)、後者は息災法 (santi) に属する儀軌かと思われる。それらは密教の四種修法に属するものなのである。

以上のようにインド教との関係は絶えず続き、特に末期の密教においてはそれと全く類似し区別すら出来ない場合もあるといわれている。後期密教とインド教との具体的詳細な関係については今後の課題としたい。

今は MNK におけるインド教との関係を通して発展変容する密教についての一断面を窺つたまでである。

- 1 Skt. G. Sastri 本、Tib. デルゲ版を使用。
- 2 Skt. p. 298, Tib. Na-230a。大二〇、八九一b
- 3 「形成期の密教」(論集三号予定)。
- 4 Skt. p. 560、Tib. 296a。大二一、八〇a
- 5 Skt. p. 561、Tib. 296b。大、同右
- 6 Skt. p. 561、Tib. 296a。大、同右
- 7 Skt. p. 561、Tib. 296b。大、同右
- 8 同右。